

4-1 (別添)

研修員受入れ実績



## ペルナンブコ大学研修員

研修員氏名	性	研修科目 (英)	来日日	帰国日
MONICA MANIA CAVAL CANTE BARBOSA	2	PATHOLOGY (病理学)	870303	870906
PAULO ANIONIG PADO VAN	1	ELECTRON MICROSCOPY (電顕学)	870324	870915
ISAIRAS PEREIRA PA DOVAN	2	ELECTRON MICROSCOPY (電顕学)	000000	000000
FRANCISCO FERNANDES AMANCIO	1	PARASITOLOGY (寄生虫学)	880301	880831
ALLANA E. DO NASCI MEKTO	2	ELECTRON MICROSCOPY (電顕学)	880301	880831
MARIA DAS GRACA CA MARA ANTAS	2	MICROBIOLOGY (微生物学)	880301	880930



4-2 (別添)

専門家派遣実績



(1) 協力実績

		1984	1985	1986	1987	1988	1989
E/N		5/25 ←					5/24 →
JAPAN'S FISCAL YEAR		59	60	61	62	63	64
CONSTRUCTION		→ XOPEN					
SUPPLY & INSTALLATION OF M/E		(200mil YEW) (100) (80)					
LEADER		ASAMI 12/8 — 12/21					
LIAISON OFFICER		TATENNO 9/12 — 5/24					
PARASITOLOGY		TANABE 2/6 — ROYAMA 5/24					
PATHOLOGY		TASHIRO 12/3 — 12/21 6/21 — 7/4					
IMMUNOLOGY		TASHIRO 4/8 — 5/18 5/5 — 8/3 YANAZAKI 8/27 — 9/26 SUZUKI 10/22 11/19 KOJIMA 10/26					
MICROBIOLOGY		KOBAYASHI 8/14 8/2 — 8/1					
BIOCHEMISTRY		YOKOKAWA 8/2 — 9/4 MIURA 8/2 — 11/1					
ELECTRON MICROSCOPY		KANAKO 10/21					
TISSUE CULTURE		KOBAYASHI 8/2 — 8/1					
VIROLOGY		ENONOTO 4/8 — 8/6 MURAI 6/6 — 9/14 12/25 — 12/24					
ENGINEER		NAGAKURA 12/19 — 12/18 2/2 — 8/1					
JAPANESE EXPERT		IYOGI 12/3 — 12/16 3/2 — 4/30 3/21 — 4/20 3/21 — 4/29 4/23 — 3/17 3/21 — 4/29 12/5 — 3/9					
JAPANESE		IYOGI 12/3 — 12/16 3/2 — 4/30 3/21 — 4/20 3/21 — 4/29 4/23 — 3/17 3/21 — 4/29 12/5 — 3/9					
TRAINING IN JAPAN		DAULO (IMMUNO-PATHOLOGY) 6/13 — 8/26 MARIA IEDA (IMMUNOZOLOGY) 10/2 11/6 3/3 — 9/6 9/10 — 12/19 ADONS (PATHOLOGY) 3/3 — 9/6 6/13 DIVANE (PARASITOLOGY) 1/29 MONICA (IMMUNOLOGY) "					
COUNTRYPART		LUCIANO (IMMUNOLOGY) 10/10 10/11 (84 3/1 — 84 8/31) NICODEMO & (IMMUNO-PATHOLOGY)					

専 門 家 派 遣 実 績

JAPANESE FISICAL YEAR 1985/1986

専門家氏名	専門家 号	指導科目	長短 区分	統 新規	派 遣 期 間	帰国済赴 任中区分	赴 任 時 現 職
五代儀 和 彦	4	機 材 据 付	短	新規	86. 3. 4 ~ 86. 5. 17	帰国済	アイテック株式会社設計課 係長
矢 部 善 司	4	機 材 据 付	短	新規	86. 3. 21 ~ 86. 4. 25	帰国済	柳三英製作所公務部 公務一課長

JAPANESE FISICAL YEAR 1986/1987

氏 名	専門家 号	指導科目	長短 区分	統 新規	派 遣 期 間	帰国済赴 任中区分	赴 任 時 現 職
田 代 往 夫	2-1	病 理 学	短	新規	86. 4. 10 ~ 86. 5. 14	帰国済	慶応義塾大学医学部病理学教室 専任講師
榎 本 康 弘	2-1	電 子 顕 微 鏡	短	新規	86. 4. 10 ~ 86. 7. 3	帰国済	慶応義塾大学医学部病理学教室
山 崎 春 久	5-1	病 理 学	短	新規	86. 5. 7 ~ 86. 7. 30	帰国済	柳薬物安全性試験センター 研究員
鈴 木 裕	2-1	病 理 学	短	新規	86. 6. 29 ~ 86. 9. 22	帰国済	慶応義塾大学医学部病理学教室 係主任
田 辺 将 信	2-2	寄 生 虫 学	長	新規	86. 8. 10 ~ 87. 8. 11	帰国済	慶応義塾大学医学部寄生虫学教室 助手
建 野 正 毅	2-1	寄 生 虫 学 チームリーダー	長	新規	86. 9. 14 ~ 89. 5. 20	赴任中	自営
五代儀 和 彦	4	機材ニュータイプ タイプ調査	短	新規	86. 11. 25 ~ 87. 3. 24	帰国済	アイテック株式会社設計課 係長
矢 部 善 司	4	機 材 据 付	短	新規	86. 12. 7 ~ 87. 3. 3	帰国済	柳三英製作所公務部 公務一課長
永 倉 貢 一	3	病 理 学	長	新規	86. 12. 21 ~ 87. 12. 14	帰国済	東海大学医学部寄生虫学教室助手
蟻 山 はるみ	5-2	業 務 調 整	長	新規	87. 2. 8 ~ 89. 5. 20	赴任中	国際協力センター ビジネスター 職員



JAPANESE FISICAL YEAR 1987/1988

氏名	専門家の号	指導科目	長短区分	統規	派遣期間	帰国赴任中区分	赴任時現職
村居達雄	2-2	電子顕微鏡全般	短	新規	87. 6. 18 ~ 87. 9. 10	帰国済	順天堂大学中央電子顕微鏡室 室長補佐
横井宗雄	0-2	計画打合せ	短	新規	87. 7. 29 ~ 87. 8. 31	帰国済	千葉大学 名誉教授
小林正規	3	寄生虫学	長	新規	87. 8. 4 ~ 88. 7. 28	帰国済	慶応大学医学部寄生虫学教室 助手
金子信明	6-1	寄生虫学	長	新規	87. 8. 4 ~ 88. 10. 28	帰国済	慶応大学医学部寄生虫学教室 助手
小林仁	3	免疫学	長	新規	87. 8. 4 ~ 89. 7. 28	赴任中	千葉大学医学部寄生虫学教室 助手
竹内勤	2-1	寄生虫学	短	新規	87. 8. 17 ~ 87. 8. 19	帰国済	慶応大学医学部寄生虫学教室 教授
三浦左千夫	2-1	病理学	長	新規	87. 10. 29 ~ 88. 12. 22	赴任中	慶応大学医学部 助手
小島莊明	1-1	免疫学	短	新規	87. 10. 24 ~ 87. 11. 15	帰国済	千葉大学医学部 教授
竹内勤	2-1	寄生虫学 (計画打合せ)	短	新規	87. 11. 3 ~ 87. 11. 12	帰国済	慶応大学医学部寄生虫学教室 教授
高岡よし子	5-2	業務調整	短	新規	87. 11. 5 ~ 87. 11. 11	帰国済	JICA 医療協力部医療協力課
榎田孝一	3	電子顕微鏡	短	新規	87. 12. 27 ~ 88. 12. 20	赴任中	防衛医科大学校寄生虫学教室 助手
五代儀和彦	4	機材ユーティリティ調査	短	新規	88. 1. 5 ~ 88. 3. 12	帰国済	アイチック機技術部設計課 係長
南嶋洋一	0-2	ウルス	短	新規	88. 1. 31 ~ 88. 2. 24	帰国済	宮崎医科大学 教授
橋裕司	4	組織培養	短	新規	88. 2. 4 ~ 88. 7. 28	帰国済	東海大学医学部 助手
柴鶴義人	2-1	ウルス	短	新規	88. 2. 21 ~ 88. 4. 13	帰国済	宮崎医科大学 助教授
建野正毅	2-1	寄生虫学 チームリーダー	長	継続	86. 9. 14 ~ 89. 5. 20	赴任中	自営
蟻山はるみ	5-2	業務調整	長	継続	87. 2. 8 ~ 89. 5. 20	赴任中	国際協力サービセンスター 職員

JAPANESE FISCAL YEAR 1988/1989

氏名	専門家の号	指導科目	長短区分	継続新規	派遣期間	帰国赴任中区分	赴任時現職
竹内勤	2-1	寄生虫学	短	新規	88. 4. 23 ~ 88. 5. 5	帰国済	慶応義塾大学医学部寄生虫学教室 教授
高岡よし子	5-2	協力打合せ	短	新規	88. 4. 24 ~ 88. 4. 27	帰国済	国際協力事業団医療協力部医療協力課
奥沢英一	5-2	寄生虫学	短	新規	88. 7. 24 ~ 89. 7. 19	赴任中	慶応義塾大学医学部寄生虫学教室 教授
竹田美文	0-2	微生物学	短	新規	88. 8. 3 ~ 88. 8. 15	帰国済	東京大学医科学研究所細菌感染研究部 教授
多田功	0-2	寄生虫学	短	新規	88. 8. 4 ~ 88. 9. 8	帰国済	熊本大学医学部寄生虫学病教室 教授
長尾嘉明	2-2	機材修理	短	新規	88. 8. 12 ~ 88. 8. 27	帰国済	㈱メデイサン 社長
高橋次男	5-1	機材修理	短	新規	88. 8. 12 ~ 88. 8. 27	帰国済	㈱メデイサン
小島明	1	免疫学	短	新規	88. 10. 14 ~ 88. 10. 22	帰国済	千葉大学医学部寄生虫学 教授
野崎智義	6-1	病理学	短	新規	88. 10. 28 ~ 88. 10. 22	帰国済	慶応義塾大学医学部寄生虫学教室 助手
建野正毅	2-1	寄生虫学 チームリーダー	長	継続	86. 9. 14 ~ 89. 5. 20	赴任中	自営
蠟山はるみ	5-2	業務調整	長	継続	87. 2. 8 ~ 89. 5. 20	赴任中	㈱国際協力サービスマスター 職員
小林正規	3	寄生虫学	長	継続	87. 8. 4 ~ 88. 7. 28	帰国済	慶応大学医学部寄生虫学教室 助手
小林仁	3	免疫学	長	継続	87. 8. 4 ~ 89. 7. 28	赴任中	千葉大学医学部寄生虫学教室 助手
福田孝一	3	電子顕微鏡	短	継続	87. 12. 27 ~ 88. 12. 20	赴任中	防衛医科大学校寄生虫学教室 助手
三浦左千夫	2-1	病理学	長	継続	87. 10. 29 ~ 88. 12. 22	赴任中	慶応大学医学部 助手
橋本裕司	4	組織培養	短	継続	88. 2. 4 ~ 88. 7. 28	帰国済	東海大学医学部 助手

4—3 (別添)

主要供与機材実績



年度	主要供与機材名	金額(C.I.F.)
59	電子顕微鏡(日本電子製JEM-100CX, II型) 真空蒸着装置	90,000
60	ミクロトーム, ディスカッション顕微鏡 超低温槽, 研究用双眼顕微鏡 実験台, 画像解析装置 他	107,000
61	高速冷却遠心器, 電子上皿天びん 濾過装置用器具, 動物飼育ゲージ 他	96,000
62	冷却遠心器, クリーンベンチ ディープフリーザー, 分離用超遠心器 他	91,000
計		

(単位：千円)



## 5. 協力期間延長について





## 5. 協力期間延長について

### 5-1 ブラジル側の要望(資料)

ベルナンブコ大学としての延長希望は3年間、即ち1989年5月～1992年5月である。

その考え方としては、1988年の4月に全部門(9)の体制の整備が終了し、実際の開始時点となったこと。また本免疫病理センターに、臨床研究部門を設置することの重要性が認識されてきたこと。この臨床研究部門には内視鏡、超音波診断装置等の臨床診断機材を設置する必要性があること。

またこの臨床研究部門の設置の目的は、現在の免疫病理センターにおける基礎研究と有機的に連携し、研究活動をより一層しやすくすることと、ブラジルにおける医師の熱帯病感染症の研修の場にしたい、ということである。

将来的には、東北ブラジルにおける熱帯病研究の中心的な施設にして行きたいという構想をもっている。

この構想の実現のために更に日本から機材や専門家、研修員の受け入れを期待している。

この延長の考え方については、ブラジル教育省も支持している。



## 6. 臨床研究部門の設置について



## 6. 臨床研究部門の設置について

### 6-1 経緯及び目的

1987年(昭和62年)5月に開催された Executive Committee ではじめて議題に取上げられた。

もともと本免疫病理学センターは熱帯感染症の種々の病因や免疫等について研究することを目的として出発した。しかし実際に研究活動が開始されると、主として生物学系、基礎医学系の研究が主になり、熱帯病感染症病因の人体に与える病状の変化、病態生理等との関係についての研究の必要性が生じてきた。

このため臨床研究部門を設置し、必要な臨床検査のための機材を導入し、現在の免疫病理学センターと密接に連携しながら研究を進め、引いては熱帯感染症の改善に貢しようとするものである。

しかしながら問題は、これらの臨床研究を推進して行くための場所がないということである。計画では約1,000㎡のスペースが必要となるが、現在の本施設内には当初予定しておらず、従って新しくスペースを確保することは不可能であった。その後この臨床研究部門の設置については日本国内の専門家委員会でも取上げられ、その必要性が認識された。また必要なスペースについては、プロジェクト遂行のため不可欠のものであれば「プロジェクト基盤整備費」によりJICAにより建設されることもあり得るという見解が示されてきた。

さらに1988年(昭和63年)4月に開催された Steering Committee において正式議題として提出され、臨床研究部門の必要性及びその建設について日伯双方の合意が得られた。

なお、本 Steering Committee にはブラジル教育省、外務省のそれぞれの担当官も出席し、意見を述べている。

即ち教育省は設置案を全面的に支持し、教育研究活動の地域への貢献ということで重視している。ただし予算的には非常にひっ迫しているので、日本政府及び伯外務省への協力支持を求める形となっている。

また伯外務省も設置案に反対するものではなく、その必要性を認めている。ただし現行の技術協力の枠内では建設そのものに対する協力は受け入れられないという立場をとっている。

さらに伯政府は技術協力の枠外で建設に対する協力を要請することを大学、教育省に対してすすめる立場にある。



## 7. 総合評価





## 7. 総合評価

### 7-1 評価チームの見解

今回の評価チームの任務は、本プロジェクトのこれまでの実績を評価するとともに、B/Dのマスタープランに沿って協力期間終了後の延長の必要性の有無、さらには従来提起されてきた臨床研究部門の設置の必要性及びその建設についての考え方等を調査するものであった。

評価チームは今回の調査期間中ベルナンブコ大学学長、日本人専門家、免疫病理研究センターのカウンターパート、教育省、外務省の多数の関係者との意見交換、協議を通じ、臨床研究部門の設置の必要性を認めた。その理由としては、次の通りである。

- 1) 熱帯感染症の臨床研究を平行して行うことは、基礎研究の一層の充実、発展をもたらすことができる。

即ち、現在既に熱帯感染症の研究テーマとして取上げられている（赤痢）アメーバ、シャーガス病、住血吸虫症、糸状虫症等、いずれもその患者の症状、病態の推移等、臨床所見の研究との関連を無視しては優れた研究成果が見出せないものと考えられる。

- 2) 臨床研究を行うことにより熱帯感染症のコントロールにより一層寄与出来る。

即ち、本研究プロジェクトの目的はE/Nの第一項にのべられているように、「熱帯寄生虫に関する研究活動を改善」するだけでなく「ブラジル北東部における衛生状態の改善を目的として事業を相互に協力して実施する」とある。

従って臨床研究を行うことは、本プロジェクトの目的を一層具体化して行くことになるものとする。

- 3) 臨床研究を実施することにより、大学の中により幅広い協力体制を得る結果となり、日伯双方の理解を促進する働きをもつこととなる。

即ち、これまでの研究の活動状況をみると、基礎研究、あるいは生物学系統の研究にウエイトがおかれ、臨床医学系の参加が少なく、バランスがとれているとは言い難かった。

臨床研究部門を設置することにより広く熱帯臨床医学者の参加が得られ、大学内での協力がより円滑に得られるようになるものと思われる。

ただし、評価チームとしては、次のような課題を大学内部で検討し解決する必要があることを指摘した。

- ① 現在の医学部大学病院の運営との関連
- ② 臨床研究部のスタッフ、運営費の確保
- ③ 患者の取扱い上の問題

即ち、治療をどうするか、患者の人権の問題を含めた倫理上の問題への対処方針  
なお評価チームとしては、本臨床研究部門の設置問題は新しい課題であるが、現在のE/Nの枠内で追加し得る項目と考える。即ち、本プロジェクトの目的に沿うことは前記2-2)で述べた通りであるが、「臨床研究」分野についてはE/Nの第一項の「(h)両政府の関係当局

間で合意されるその他の分野」で読むことができるものとする立場である。

## 7-2 ブラジル側の考え方

### 1) 免疫病理センター（所長，他）

①プロジェクトの延長，②臨床研究部門の設置，③各分野の充実について3月末に教育省に対して要請を出している。

### 2) ペルナンブコ大学側（学長，副学長）

① 臨床研究部門を是非設置したい。このため外務省の障害を乗り越えたいと考えている。  
（学長）

② 大学の評議会のメンバーが免疫病理センターの重要性を認識し，本日（63年5月2日午後）評議会のメンバーが視察に行く。その結果，学長直属の組織（機関）として位置づけられれば，予算，人員がとり易くなる。（学長）

③ 教育省は，このプロジェクトの延長と，臨床部門の設置について全面的に支援したいと言っている。外務省は延長は問題ないと言っているが，建物の建設については問題は残ると言っている。この問題については，ペルナンブコ大学としても学長を中心に何とか解決したいと考えているが，外務省の問題もあり自分達だけでは解決できない。選択肢をいろいろ考えておく必要がある。たとえば病院の空いている病棟を使うなど……（副学長）

### 3) 伯教育省（国際技術協力調整官）

① 延長要請についてはペルナンブコ大学の要請を教育省としては承認し，4月27日に外務省に廻した。要請期間は3年で出ているが，JICAの方針が2年ということであれば止むを得ない（問題はない）と考える。

② 臨床研究部門の設置についてはその必要性，重要性については充分理解できる。大学の要請を支援したい。

③ 外務省との交渉は大臣（教育）を通じてやることになると思う。この問題で来週（5月9日の週）ペルナンブコの学長と教育大臣の会談が行なわれる予定になっている。外務省ともよく協議していい解決法を見出したい。

④ 外務省が技術協力の枠内でできないということであれば直接日本にやってもらうことも考えられる。州と日本との話になる。

### 4) 伯外務省（科学技術協力局 日本担当官）

① 2年の延長については問題はないと考える。4月28日に教育省から延長要請が出ているので，なるべく早く解決したい。

② 臨床研究部門の必要性については充分理解する。

ただし，日本が建物を供与することについては，技術協力のスキームから外れるので，受け入れられない。

技術協力と別の方法を考えて欲しい。

③ R/Dについて

4月28日に教育省から延長要請が出た。外務省としてはこれを検討し、在伯日本大使館に対して要請書または口上書を出す。そのとき日本はR/Dの案を出してもらいたい。この案に対して、大学とJICAとの間でR/Dのディスカッションをしてもらいたい。

④ ブラジル政府が日本大使館に意志表示するのにあと3週間かかる。その理由はペルナンブコ大学から出て来た書類に不備があるので、書き直させる必要があるからである。

5) 日本大使館(佐々木公使)

① 必要で重要なものであれば伯外務省もNoとはいえないであろう。関係者の熱意と説得がものを言うであろう。ブラジル外務省が事実上了解しないものはできないであろう。

② 日本側の問題というよりは、伯側の熱意の問題ではないか。

③ 既存の建物を使う方法はないのか。

④ 教育省、外務省の会議、合意が重要になるのではないか。直接の研究者の声もよく通るであろう。

⑤ 伯側に1千万位の建物を建てさせ、日本が内装をやるという方法はないのか。

⑥ 外務省としてどのような書類が必要なのか、問い合わせてみたい。



## 8. 大学からの延長要請要約



PROPOSAL SUBMITTED TO BRAZILIAN & JAPANESE AUTHORITIES BY  
THE FEDERAL UNIVERSITY OF PERNAMBUCO (UFPE) IN ORDER TO  
EXTEND THE SCIENTIFIC COOPERATION WHICH PRODUCED THE  
LABORATORIO DE IMUNOPATOLOGIA KEIZO ASAMI - LIKA.

Abstract:

Title of the project : Reestruturação, reequipamento e desenvolvimento do Núcleo interdepartamental de imunopatologia da UFPE.

Time - Since May 1989  
Until May 1992

External cooperation support : JICA

Estimated costs :

JICA - c.a. US\$ 2,500,000.00  
UFPE - c.a. Cz\$ 97,148,190.00 (US \$ 747,293.00)

To justify the plea - The social and scientific relevance of the cooperation were presented. Also, a description of LIKA, as it is now, was shown. For instance, it was mentioned that nine(9) sectors are set up : HE, Pathology, Parasitology, and so on.

The fact that just on April 1988 all sectors were finished was presented as a real start time for the scientific production at an appropriate speed. Therefore, for the success of LIKA is essential an extension so that the vital "track record" could be obtained.

Else, an interface between LIKA and the clinical facilities was understood as a very important achievement. Clinical facilities will represent endoscopy, ultrasound, fluoroscopy, and so on. Therefore, Japanese and Brazilian Medical Doctors will work together with two objectives:

- 1) Scientific aims linked to the actual facilities inside of LIKA and
- 2) Training unit for Medical Doctors from the Brazilian side. It is worthwhile to notice that this facility will compose the LIKA and not a different institution. Therefore, in the future, all this complex will be a standard scientific institution studying tropical diseases in South America.

Objectives of the proposal :

1. To develop research in tropical diseases.
2. Training facility - Human resources formation.
3. To improve health condition of brazilians.

To achieve these objectives scientific projects will be carried out:

A list of the actual projects was presented.

The method of evaluation will be based on:

Papers published in international standard periodicals.

Communications presented in scientific meetings.

Contributions to the health conditions of brazilian people,  
such as, "kits" for diagnostic, biological products,  
patents.

Ms. and Ph.D. thesis produced inside of LIKA

Requested cooperation:

Equipments for the clinical sector.

Japanese experts (15 per year)

Brazilian experts training (03 per year)

A list of the actual staff was presented :

See annexed.

Furthermore, it was called the attention to the fact that LIKA can also be used for the Japanese side for their researchers training in tropical diseases.





SERVICO PÚBLICO FEDERAL  
UNIVERSIDADE FEDERAL DE PERNAMBUCO  
LABORATÓRIO DE IMUNOPATOLOGIA PROF. KEIZO ASAMI

Recife, 02 de dezembro de 1987

Of. nº 92/87

Exmo. Sr.

Ministro Mário Augusto dos Santos  
Secretário de Assuntos Internacionais  
Ministério de Educação e Cultura

Submetemos a V.Excia., para a devida análise e aprovação proposta de ampliação do Laboratório de Imunopatologia Prof. Keizo Asami, dentro do Acordo Internacional denominado "Projeto de Reestruturação, Reequipamento e Desenvolvimento do Núcleo Interdepartamental de Imunopatologia". Nela está contemplada a criação de um Setor de Pesquisa Clínica, ressaltando-se que a mesma resultou de prévios entendimentos entre a Universidade / Federal de Pernambuco e o lado Japonês.

No aguardo de um pronunciamento de V. Excia., apresentamos os nossos protestos de estima e consideração,

Atenciosamente,

Prof. Luiz Bezerra de Carvalho Jr.  
Coordenador do LIKA

LBCJ/sm.

## SETOR DE PESQUISA CLINICA DO LIKA

A Universidade Federal de Pernambuco dispoe atualmente de um laboratorio sofisticado na area de pesquisa bio-medica montado mediante acordo entre os Governos do Brasil e Japao. Trata-se do Laboratorio de Imunopatologia Prof.Keizo Asami sediado no campus desta Universidade.

O Laboratorio de Imunopatologia Prof.Keizo Asami(LIKA) constitui-se de varios setores nas areas de:

- Parasitologia;
- Patologia;
- Imunologia;
- Microscopia Eletronica;
- Microbiologia;
- Cultura de Tecidos;
- Virologia e
- Bioquimica.

O projeto de Reestruturacao,Reequipamento e Desenvolvimento do Nucleo Interdepartamental de Imunopatologia, nome oficial do projeto conforme o Acordo de Cooperacao Tecnica Brasil/Japao firmado em 25 de maio de 1984, visa a implementacao das atividades de pesquisa sobre doencas parasitarias tropicais e a melhoria das condicoes sanitarias no Nordeste brasileiro.

O LIKA estara totalmente instalado e funcionando com toda a sua potencialidade em fevereiro de 1988. A Universidade Federal de Pernambuco em entendimentos com os peritos japoneses, a frente o Diretor Japonês do Projeto, Prof.Takeuchi, bem como o lider da equipe japonesa atualmente instalada na Universidade, Prof. Tateno, além de representacao da Japanese International Cooperative Agency(JICA),resolveram ampliar o LIKA para comportar um setor de pesquisa clinica anexo ao atual laboratorio, no sentido de proporcionar uma area de interface entre as atuais facilidades do mesmo e o setor clinico da Universidade,que compreendem o Centro de Ciencias da Saude e o Hospital das Clinicas.

O Prof.Amaury Coutinho, Professor Titular de Clinica Medica da UFPE, tem prestado relevante assessoria especializada ao Coordenador do LIKA, Prof.Luiz Carvalho, e ao Lider da Equipe Japonesa Prof.Tateno, que resultou na proposta que ora se apresenta as autoridades competentes do Governo brasileiro para analise, ressaltando-se o aspecto importante do perfeito entendimento entre as duas partes interessadas, isto e, Universidade Federal de Pernambuco e o lado japonês.

Os objetivos do Setor de Pesquisas Clinicas do LIKA compreendem:

- 1.Pesquisar as doencas tropicais sob o ponto de vista clinico-laboratorial, complementando

- aquelas desenvolvidas no LIKA.
2. Ensinar a nível de pos-graduação os profissionais na área de saúde: residentes, mestrandos e doutorandos.
  3. Prestar assistência médica em casos especiais onde o estabelecimento diagnóstico venha requerer o emprego de equipamentos sofisticados previstos na instalação do setor em análise.
  4. Estudar epidemiologicamente as doenças tropicais na área do Nordeste brasileiro.

Ressalte-se a importância que a presente ampliação significaria dentro do contexto geral concebido no Acordo firmado entre os Governos do Brasil e Japão, haja vista ser da mais alta relevância o perfeito entrosamento entre a pesquisa básica com a clínica na área médica, com especial atenção às doenças tropicais. Adicione-se ao que foi referido a carencia de laboratórios de pesquisas no nosso meio, a necessária integração com os setores e grupos clínicos do Hospital das Clínicas, vizinho do futuro Setor de Pesquisa ora proposto, os trabalhos anteriores de pesquisa clínica sobre doenças tropicais, particularmente esquistossomose, dos referidos grupos reconhecidos nacionalmente.

Preliminarmente, concebeu-se para o Setor de Pesquisa Clínica do LIKA a seguinte disposição:

1.5 salas de ambulatorio	70	m <sup>2</sup>
2. Setor epidemiologico	40	m <sup>2</sup>
3. Laboratorio Clinico	120	m <sup>2</sup>
4. Setor de Endoscopia	60	m <sup>2</sup>
5. Setor de fluoroscopia	70	m <sup>2</sup>
6. Enfermaria de recuperacao	40	m <sup>2</sup>
7. Sala de espera	25	m <sup>2</sup>
8. Vestiario	20	m <sup>2</sup>
9. Sala de apoio	25	m <sup>2</sup>
10. Lavatorio	20	m <sup>2</sup>
11. Almojarifado	40	m <sup>2</sup>
12. Sala de tratamento	15	m <sup>2</sup>
13. Gabinete do Supervisor	15	m <sup>2</sup>
14. Biblioteca	20	m <sup>2</sup>
15. Corredor, acesso, etc.	320	m <sup>2</sup>
Total	900	m <sup>2</sup>

Na concepção do Setor de Pesquisa Clínica do LIKA a construção das facilidades físicas (edifício) é vista como uma parte inseparável dos equipamentos a serem doados, tendo em vistas as sutilezas destes, bem como o prazo exiguo estipulado para a sua instalação (maio de 1989), pelo que a doação dos equipamentos pelos japoneses compreenderia a inclusão da construção do Setor. Há informações de que a JICA tem recursos financeiros e técnicos para doar a UFPE com vistas à edificação e equipamentos para o setor em discussão, além de que a Universidade cederia terreno próprio





JICA